アンケートを終えて　―スマイルシードとして今考えること―

対象者全てに配布できない状況があり、今回のアンケート調査には限界がありました。アンケート回収の過程で、サービスを必要としている状況にありながら生活に追われて余裕がなく回答を寄せてもらえなかった人たちの存在も見えてきました。親同士のつながりが薄かったり、つながることに対して消極的だったりする人たちには、アンケートの趣旨自体が伝わりきらなかったという懸念もあります。

それでも回収率７割を超えて寄せられた回答からまず感じられたのは、子どもの将来を思い、今子どもにとって必要なことは何かを考える親心、親の思いです。

もうひとつは届くべきところに福祉サービスや情報は行き届いているのか、という疑問です。必要とする人に福祉サービス情報が入りづらく、また自ら動きにくい状況のため相談までのハードルが高くなり、更にサービス受給される事業所にたどり着けるまで、長い過程になりがちな回答が数多く見られました。

アンケートの結果から、社会的サービスの利用ではなく親や親族の援助に頼っている人たちの存在も明らかになり、広い意味での「家族カプセル」の実態が垣間見られました。祖父母の援助が得られるかどうかは、一般家庭でも就労を継続できるかどうかの要因のひとつです。祖父母が元気なうちに、社会的支援である福祉サービスの段取りをしておく必要があると思います。

障がいのある子どもたちが地域で充実した生活を送ることで、子どもたちはもちろん、その家族の自立にもつながると考えられます。そのためには、使いやすいサービスの充実とその絶対量の確保がかかせません。福祉サービスは、必要なときに、必要な量が、必要な人に届くこと、が大切です。保護者が福祉サービスを必要と感じてはいない子どもについても、何らかの支援と活動の場は必要ではないでしょうか。

学校については、長期休みのあり方やクラブ活動についても再考頂き、地域においても活動の場が広がることを期待します。障がいのある子どもが家庭・学校・そして地域の中で育っていき、多くの方と出会いたくさんの経験をしてほしいと願わずにはおれません。

行政にはお願いとして、継続的に障がいのある子どもの福祉サービス利用のニーズを調査して頂きたいです。現在の放課後教室の待機やショートステイの受け入れできない件数を把握し、今後、Ｎプランや子どもプランなどの施策の中で目標数値を示し、その問題解決策について具体的に提示して頂きたく思います。また、福祉サービスについて説明会などを実施し、普段からサービスの認知を高めて、利用者側の準備を促すようお願いします。

最後に、自由記述の内容については、似た内容のものをまとめて記載するなど、記述して頂いた方全員分を掲載できなかったことをお詫びします。アンケートへご協力頂いた方々に心より感謝しております。